

創刊のことば

齋藤隆雄*

こうして「循環制御」の創刊の日を迎えることができ本当に嬉しい。ここまで漕ぎつけることができたのは何と言っても周囲の方々の暖かい御尽力があったからこそそのことであって、紙面を借りてここに心からお礼を申し上げる。

雑誌を創刊し維持して行くことは必ずしも楽な仕事ではないし、あまり報われることも多くはないと十分承知していた。にもかかわらずあえてそれを企画し実行に移して来たことについては、その動機や物事の経緯のあらましを御紹介しておく必要を感じず。

そもそも事の始まりは循環制御研究会の創設を計画し、関係の諸先生方と御相談を始めた頃のことである。

循環制御研究会は雑誌「循環制御」と正式には直接の関係はないのであるが、研究会記録の掲載等実質的には表裏一体と見られる点も多いので誕生の経過のからみなどを主として紹介させて頂きたい。

本会は、従来の内科的循環器学や心臓血管外科学とは違った角度、すなわちもう少しダイナミックな視点から循環を見直してみようというところに会創設の趣意があったわけである。限られた時間帯の中で循環機能を積極的に制御するといった領域の仕事はその性格上麻酔や ICU における診療と密接な関係があることは言うまでもない。そのためということもあって、この方面の研究や仕事を既存の循環器関係の学会等へ持ち込んでも、考え方の基本に大きな違いがあるためか、どうか

どうも議論の歯車が咬み合わないところがあることはかねてから指摘されていた。必ずしも麻酔科特有の問題ではなくて循環器学の根本に触れる問題であっても、内科的あるいは外科的思考形態に合わない場合「この演題は麻酔の問題ですから麻酔科の方同志で御討論を」などとほぐらかされ体をかわされることも稀ではなかったように思う。一方、麻酔学会等においても循環の根本に触れる肝腎のポイントについての討論が十分行なわれず、今ひとつ食い足りない思いをさせられることが多かったと感ずるのは私 1 人ではあるまい。

まことに素朴な動機と言え言えるのであろうが、そもそも事の始まりは、このような考え方に共鳴する何人かの方々が集まって、独立した発表の場、議論の歯車が十分咬み合う討議の場を持つところから出発したわけである。いわば或種の「境界領域指向」ということであるが、しかしわれわれの考える「循環制御」の意味するところは（最初の動機はともかく現在は）決して対象を狭義の「制御」に限定することを意図するものではない。広く関連領域を含めて、細胞レベルから全身的規模に到るまで、循環機能の調節を扱って行こうとするものである。柔軟な思考こそが学問の発展を支えるものだと信ずる次第である。その意味では広汎な各専門分野からの演題提出を期待するわけである。

さて会を発足させるに当たって機関紙ないし会誌をどうするかが問題になった。研究会の演題ならびに討論の記録、会告、会員名簿などととも原著、総説、講座等を掲載するジャーナルをわれわれ自身で持ちたいという切実な要望は当然のこと

* 徳島大学医学部麻酔学教室（教授）

ながら強く起こって来た。しかし既存の学会を見てみても会誌の発行は大事業なのである。とくに会費の中からの出版費の支出が最近とみに重荷になりつつあることはどことも共通なようにお見受けした。

これから作ろうという循環制御研究会（将来は学会）が今後どれほど大きくなるかはわからぬが、少なくとも発足当初から立派な会誌を自前で発行できるほどの経済力を持てるとはちょっと考えられなかった。

運営形態がいわゆる commercial journal であってしかも学会の機関誌に準ずる性格を持った雑誌はおそらくこのような問題に対するひとつの解決策とも考えられた（現に雑誌「麻酔」等にその例を見ることができる）。早速いくつかの出版社にこの線に沿った交渉を持ちかけようとしていた段階で、たまたま小玉株式会社との間にこの話が始まり順調に話が進んで、雑誌「循環制御」

(Circulation Control) は日の目を見ることになった。発行者小玉株式会社（代表小玉外行氏）ということになる。出版を専業とする出版社ではなく、製薬会社が発行人であることに抵抗を感じる向きも少なくなかったが、雑誌「臨床麻酔」が本来医療器械輸入業者である真興貿易株式会社内に設けられた出版部から発行されている例にならうのも、それほど悪くはなからうということに落ち着いた。小玉株式会社には出版部を設け循環制御編集室を開設して頂き、新鋭かつ有能なスタッフを配置願った次第である。専業の出版社にお願いした場合よりも創刊当初の運営の苦しい時期にあまり目先の収支で目の色を変えずにすみ、多少の余裕を以て大局から長期的展望をすることができる利点があるとも考えた。この辺は熟考し循環制御研究会の役員会でも討議を重ねて、最終的には第1回循環制御研究会（1980年6月3日、於名古屋市民会館、会長斎藤隆雄）の総会議事において最終的に御承認を頂いた。同研究会の記録は総会議事を含めて本創刊号に掲載されているのでごらん頂ければ幸いである。

現時点では一応年2回程度の発行を予定している。今後おそらくもう少し頻回に発行することになると思われるが、今のところこの程度の回数にして内容を重厚なものにして行く方針である。原

著、総説、講座、症例、紹介、随想、巻頭言、座談会、研究会記録など従来のジャーナルの形式に従って原稿を募集し、あるいは依頼するが、あわせてできるだけ新しい視点からその時々ホットな話題をダイナミックにとらえることも目指したいと考えている。

編集顧問および編集委員合わせて数名の陣容でスタートするわけだが、今後必要に応じて委員数の増加ならびに機能分化も積極的に進める予定である。

本誌の将来を暖かく見守って下さるよう心からお願い申し上げます。

第1回循環制御研究会は第27回日本麻酔学会総会の前日6月3日午後、名古屋市民会館第1会議室において、約200名の参加者を得て開催された。3題の総説講演は講演30分、討論30分でありゆったりと討論時間があつた。講演内容の充実、見事な司会、参加者の強い関心などが結集されて実にすばらしい会であつた。討論は活発でありながら冗長に流れず、予定時間内にピタリと終了できたのである。

次期会長に高折益彦教授、次々期会長には無敵剛介教授が選出された。

定員100名内外の会場に200余名の人々が参集し、会の終了までほとんど退席者もなく、まことに充実した会を持つことができたことを私どもは重く受けとめるとともに、循環制御研究会ならびに雑誌「循環制御」に向けられた御期待に応えるべく一層の努力をして行きたいと思う。

編集方針

内容の濃い、科学的に価値の高い文章を書くことと、理解しやすい平易な文章を作ることとは本来二律背反的ではなからうか。才能があり、その事柄を十分理解している人がよほど努力しないと、まずまずの程度に両方を満足させる妥協点を見つけることはむずかしい。編集方針を立てるに当たって最も苦慮するところである。

創刊の趣旨を考慮すると次のような線に落ちつくことになると思う。すなわち、総説および原著についてはわかり易さの方をとる余り、内容のレベルを犠牲にすることは避ける。もちろん執筆者にはできるだけ平易かつ簡潔な表現をして頂くようお願いするが、何と言っても内容の濃さに目標を置くつもりである。仮り

に、そのため雑誌の印象が若干硬くなるとしたら、その分は巻頭言、講座、座談会、誌上シンポジウム、症例、質疑応答、各種紹介記事、関連学会印象記などでカバーして、平易な読んで面白い雑誌にして行きたいと考えている。

本誌の構成

巻頭言 広く各分野の方々に執筆をお願いする。内容、形式、長さとも自由。Editorial に相当。

総説 循環制御に関する重要なテーマをとりあげその方面の専門家に執筆を依頼する。投稿も歓迎する。

原著 循環制御に関連した基礎的あるいは臨床的研究論文を募集する。但し対象を狭義の「制御」に限定するものではない。

講座 いわゆる refresher course である。できるだけ平易に理論、手法等をそれぞれの権威に解説して頂く。

誌上シンポジウム 重要なテーマあるいは現在注目されている問題についてその方面の権威に moderator をお願いしてシンポジストを選んで頂き、各シンポジストから論文形式で発表して頂くとともに、論文の出揃った時点で座談会形式で執筆者同志で討論する会を開催し、その記録を論文とともに掲載する。

座談会 主として編集室が開催した座談会等の記録

を掲載する。

研究会記録 循環制御研究会（および関連会議）の講演、討論、総会議事等の記録を掲載する。

症例 循環制御に関連した興味ある症例の原稿を募集する。

関連学会印象記 主として循環器関係の諸学会の印象記(依頼)。

抄録 関連領域の文献抄訳を掲載する。

討論 本誌掲載の論文についての読者の意見 (correspondence ないし letters to the editor に相当)。

質疑応答 研究面、診療面のいずれでもよい。各号当り数を限定して、それぞれの専門家に答えて頂く。

ニュース 内外諸学会、行事、施設制度の新設、人事往来など。

施設紹介 関連諸施設の紹介記事(依頼および募集)。

新著紹介 新しく出版された関連領域の書籍を紹介して頂く(依頼)。

機器紹介 (1) 研究用あるいは診療用装置、機器等についての創意工夫、開発についての小論文。

(2) 開発中あるいは市販された新装置についての紹介記事。(1)、(2)ともに原稿は依頼および募集。

薬剤紹介 最近循環器領域で注目されている薬剤の紹介(依頼)。

会告 循環制御研究会（ならびに関連諸会議）の会告を掲載する。